

クレオパトラの魅力は洋の東西でちがう？

眞鍋由比

さて入試シーズン到来です。ふだん新聞を読んでいないとニュースに出てくることばの意味がわからなかつたりしませんか？そんな疑問点を解消すべく、今月のはと時計の特集は「ニュースに強くなる」です。週刊の中高生向け新聞や月刊の時事問題の雑誌などを講読し始めたのに加えてポプラディアネットも契約しました。ぜひわからないことは調べてください。いまさら聞けないと思われることもこっそり調べられます！ニュース解説の手練れ、池上さんの著書もたくさん所蔵しております。ぜひチラ見しにきてください。

昨年末に香月日輪さんがなくなったのはショックでした（うちにはファンが多く、彼女の小説のレシピ本もあります。）が、宮尾登美子さんがなくなったのもまたショックでした。『權』や『天璋院篤姫』などテレビドラマや映画の原作になった本を多く書かれたひとでしたが、ここでは『クレオパトラ』を紹介します。ジョージ・バーナード・ショアの『シーザーとクレオパトラ』（岩波文庫）は人生の前半を、シェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』（新潮文庫ほか）は後半を描いていますが、宮尾版は少女としてのクレオパトラから弟と結婚して女王になって、シーザー、アントニーと出会って波乱の人生をおくる物語です。ショアのクレオパトラは身勝手な、残酷なところのある幼い少女で、シェイクスピアのクレオパトラは女丸出しの迫力ある女性。宮尾さんのクレオパトラは、読んでいて日本の万葉の時代の皇女を見ているような、とても穏やかというか日本人的に共感のできる女性という感じでした。ここに絶世の美女といわれるクレオパトラとの違和感を感じる人もいるようですが、案外宮尾版のクレオパトラのほうが実際に近かったかもしれない、私は思います。パスカルの有名なことば「クレオパトラの鼻がもう少し低かったら、世界の歴史も変わっていたであろう」といわれるほど歴史を左右した美人ですが、絶世の美女ではなかったという文献も多い。プルタークやキケロなど「美人じゃない」と唱える文献のほとんどがローマ帝国側の文献であることは、やはり「おれたちローマの大事な将軍を何人もたぶらかしやがって」というやっかみが入っていると思われます。とはいえ、「美人じゃない」という記述がある本でも、彼女が7ヶ国語を話し、その話す声の響きや会話の巧みさにはやはり卓抜した魅力を、認めざるを得なかったと、書かれています。クレオパトラはプトレマイオス朝でははじめてエジプト語を話す王族で（王族はみなギリシア語を話していた）、エジプト民衆には慕われ、外交的にも自分の国の言葉を話してくれ、話を聞いてくれる美しい声の持ち主でした。そんな教養あふれる魅力的な女性を育てた古代エジプトの教育環境がすばらしいと思うのですが、古代エジプトには私たち司書のおこがれてやまないアレキサンドリア図書館があるのです。クレオパトラも学び、かつ誇りに思っていたと宮尾本にはでてきます。当時世界一の蔵書数を誇った、最大・最高の知の殿堂は、アレキサンドロス大王がエジプトを侵略したときにできたアレキサンドリアという都市にありました。シーザーがエジプトに来たときのナイル川の戦争で、焼けてしまいクレオパトラが残念がる場面がこの小説にもでてきます。5世紀にもヒュパティアという優れた女性哲学者・数学者・天文学者がこの図書館で研究していましたが、真実を追究するあまりキリスト教徒に虐殺されたときにも破壊・焼失し（映画館「アレキサンドリア」を見て下さい）、その後失われてしまった不運の図書館です。現在あるアレキサンドリア図書館は古代の栄光を復興させようとエジプト政府とユネスコが協同で作ったもの。でもナイルのたまもの、エジプトでピラミッドとともに一度は行ってみたいところですよ？クレオパトラにはなれなくても。